

高齢アッパークラスの旅行・観光における余暇としての位置づけについて

中溝一仁 立教大学社会学部 非常勤講師

E-mail : nakamizo@rikkyo.ac.jp

報告者はこれまで「日常的余暇活動とそれが与える生活の満足度」というものに焦点を当てて研究を行ってきた。それに関する質的調査を行っていく過程で、高齢者の余暇活動の一つとしての「旅行」が生活満足度に与える影響を過小評価してはならないことに気がついた。具体的には昨年実施した半構造化インタビューにおいて、回答者の多くが想像以上に「旅」に出かけており、それを生活の質を高める重要な要素であると捉えていることが分かった。旅の準備段階から楽しみにして日常生活を送っているのである。

本報告は本年8月より実施している質的調査の中間報告である。対象は「比較的金銭的に余裕がある高齢アッパークラス」で、その主な目的は彼／彼女らが日常生活において「旅行・観光」をどのように位置づけているかを知ることである。「年齢とともに仕事から余暇への比重が徐々に変わっていき、その過程において『旅』の意味も少しずつ変容している」という仮説を設け、この「旅」が生活の満足度にどのように関わってくるかについて検討を行うことを最終的な目的とする。本報告においては、特に報告者にパラダイムシフトを迫るような回答に絞って2点ほど紹介する。

現時点で調査者が感じたこととして「高齢者の旅行は義務から解放された純粋な余暇

活動である可能性が高い」という点が挙げられる。現役就労時代には、出張時に自費で1日宿泊を延長して観光するなどの工夫が必要だったり、顧客との旅行や社員旅行、家族旅行だったりして、自分の欲求だけに従って旅を楽しめるわけではない。回答からは、この時期には純粋な観光や美術館、コンサートを目的とした旅はほとんどできていないことが窺える。また、高齢者の日常的な余暇活動においては、その一部が義務化しやすい可能性について報告者はすでに指摘しているがⁱ、それに比べて「金に心配のない高齢者」の旅行は実に解放された余暇活動であり、デュマズディエの余暇の定義にも合致しているⁱⁱ。

今後の研究方針としては、富裕層だけでなくそれ以外の層に対しても順次、研究の幅を広げていかなければならないと考えている。報告者が最初に富裕層を取り上げた理由は、そこに興味の対象があったわけではなく、比較的取り組みやすいと考えたからである。なぜなら、「旅行・観光」というレジャーを実施するにあたって最も欠かせない「経済的な余裕」という条件を満たしているからである。したがって、今後は「旅行には行かない」、または「行きたくても行けない」という層にも焦点を当てる必要があるだろう。

ⁱ 中溝一仁, 2017, 「高齢社会における日常的余暇活動への参加と生活の満足度について」を参照のこと。(立教大学社科学部応用社会学研究 No.59.)

ⁱⁱ デュマズディエは「余暇とは、個人が職場や家庭、社会から課せられた義務から解放されたときに、休息のため、気晴らしのため、あるいは利得とは無関係な知識や能力の養成、自発的な社会参加、自由な創造力の発揮のために、まったく随意に行う活動の総体である」と述べている

(Dumazedier 1962=1972: 19)。Dumazedier, Joffre, 1962, Vers une civilisation du loisir?, Éditions du Seuil. (=1972, 中嶋巖訳『余暇文明へ向かって』東京創元社.)